

令和5年度第1回米子市総合教育会議 議事概要

■日時

令和5年8月24日（木）午後3時から午後4時35分

■場所

米子市役所本庁舎5階 議会第2会議室

■議事

- (1) 英語教育の推進について
- (2) 部活動の地域移行について
- (3) その他

■出席者

市長 伊木 隆司

教育長 浦林 実

教育委員 白井 靖二

教育委員 上森 英史

教育委員 荒川 陽子

教育委員 塩地 淳子

■出席職員

総合政策部総合政策課長 堀口 修治

総合政策部総合政策課総合戦略室長 遠藤 義英

教育委員会事務局次長兼子ども政策課長 長谷川 和秀

子ども政策課担当課長補佐 木村 俊文

子ども施設課長 齋木 雅徳

子ども支援課長 長尾 理恵

教育委員会事務局次長兼学校教育課長 西村 健吾

学校教育課課長補佐 仲倉 昭雄

学校教育課担当課長補佐 平野 勝久

学校教育課担当課長補佐 波多野 健司

生涯学習課長 毛利 公一

学校給食課長 伊藤 康恵

スポーツ推進課長 成田 博顕

スポーツ推進課 課長補佐 宇津宮 崇

■傍聴者数

1人

【議事概要】

■議事（1）英語教育の推進について

英語教育の推進について、資料1に沿って事務局から説明。

【委員意見】

- ① 計画訪問時に感じたのは、子どもたちが物怖じせず英語を話していること。「Englishpark for students」の取組が上手く機能している。こういう機会が増えたら良い。
- ② できたこととできなかったことの振り返りをする中で、意欲を持てるような活動にしていきたい。
- ③ 小さい時からいろんな場面で英語に触れることを期待している。
- ④ タブレット端末が有効に使え、興味深い学習にすることができると思う。
- ⑤ 英語を話す機会、体験を増やしていただいている。小さいときからの体験により、英語を身につけることができると思う。
- ⑥ ALTが6名配置されているが、中学校に一人ぐらいALTを配置できるよう増員をお願いしたい。
- ⑦ 英語は、多少間違っても、相手は言いたいことを読み取ってくれる。子どもは小さければ小さいほど、間違えることに抵抗がない。ALTとの時間をもっと増やしていただけると良い。
- ⑧ 中学校の英語教員が小学校で明るく授業されていることが、子どもたちに良い影響を与えている。小さい時から英語に触れる機会を増やしてほしい。

【市長】

- ・ ALTの加配について意見をいただいた。教育委員会で具体的な配置計画を見直して、しかるべき時期に要求していただけたらと思う。
- ・ 英会話については、多少間違っても身振り手振り等で伝わる。正解がはっきりある従来の教育の視点とは異なり、コミュニケーションを取ることが大きな目的となる。
- ・ 英語に触れる機会を増やすということ、カリキュラムの中でどう回していけるか、検討の余地がないかを考えていただきたい。

【教育長】

- ・ 英語はコミュニケーション能力が求められる。特に「話す」、「聞く」はALTに接する機会が求められる。
- ・ 初めて出会う外国人とも話すことができるようにという思いから「English Park in 米子市」を始めた。
- ・ 他の教科で実施している「めあて、まとめ、振り返り」について、英語でも取り組むことは有効だと感じた。
- ・ ICTの活用については、来年教科書が変わるが、QRコードなどデジタルコンテンツが多くなっており、授業に取り入れ、情報を共有し、タブレット端末を有効的に活用していきたい。

- ・ 低学年から英語に触れるということを強化していきたいし、世界を意識するなら中学生の学習の中身も少しグレードアップしたのも取り組んでいきたい。
- ・ ALT の増員については、しっかりと配備体制を見直して、しっかりと最大限の効果が上がるように検討した上で、ご相談したい。

■議事（２）部活動の地域移行について

部活動の地域移行の現状と課題について、事務局から資料 2 に沿って説明。

【委員意見】

- ① 部活動の地域移行については、健全育成を目的とすることを明確に位置づけることをもっと周知してほしい、それが安心につながる。市民にはそれが伝わっていないのが現状で、積極的な情報提供をお願いしたい。
- ② 指導者の確保や費用負担等、いろいろな課題があり、健全育成を目的とした団体かどうかをチェックする体制も課題。
- ③ 生徒や保護者が学校外のことを相談できるサポートセンターのようなものがあると良い。
- ④ 平日と休日の扱いの違いに子どもが困らないようにすることが大前提だと思う。
- ⑤ 部活動の地域移行のことに関わらず定期的に学校のことを発信していただくものがあれば嬉しい。好事例としては義務教育学校開校準備だより。
- ⑥ 部活動の地域移行は、もともと教員の特に休日の教員の労働時間の短縮をするために進められており、それに伴う児童生徒や保護者の不安を取り除いてもらう必要がある。
- ⑦ 地域移行は、教育的位置づけの考え方や教員側が考えている指導体制について、学校側と受け入れる地域や団体とすり合わせる必要がある。
- ⑧ 部活動の地域移行について、協議会を開催されたり、競技団体と協議をされているが、競技団体の受け入れ状況について伺いたい。
- ⑨ 外部指導者も多くないので、米子市版の地域連携を上手く行っていく必要がある。平日が教員で休日が地域移行の場合の平日と休日のすり合わせをどうするのか。試合は休日に行われることが多いので、切れ目がない指導をしていくのは難しいのではないかな。
- ⑩ 現状の部活動から移行先を探すと難しいが、競技団体側からの提案に乗っていく方法もあるのではないかな。また、競技団体について、現在、部活動が無い競技団体にも話を伺っておられるのかな。
- ⑪ 子どもは評価されると勇気をもって、自信を持って活動できる。ぜひ子どもを評価できる仕組みをお願いしたい。
- ⑫ 地域と一緒にやってやっていること、万灯であったり太鼓であったり、そういったことも入賞とか関係なく評価していただけたらと思う。スポーツに限らず、いろいろな意味で子どもたちを評価してあげてほしい。
- ⑬ 教員が一生懸命に部活動の指導をされているのを保護者もわかっている。教員と外部指導者とのすり合わせも米子市がしっかりとしたサポートをしてほしい。

【市長】

- ・ これまでの総合教育会議において、本市における部活動の地域移行は、教育の中に明確に位置付け、健全育成を目的とすることとしているところ。
- ・ 部活動の地域移行における位置づけの方向性は決まっており、こういった広報をわかりやすく行っていく。良いタイミングでしかるべき広報体制をとっていく。
- ・ 今後、地域移行を進めていくうえで、どういうチェック体制を取るのかが重要。地域移行した後で、不適切な指導や事故が起こった場合等の責任の所在など引き続き課題である。
- ・ 地域ごとに盛んな競技や活動は、「地域連携型」の受け皿になるイメージ。それについて、きちんと内申で評価していただける仕組みが必要。全ての子どもを新しい仕組みで受け入れる必要はなく、もう既に受け入れてもらい頑張っている子どもをどう評価してあげられるか、「地域連携型」の中で検討してほしい。
- ・ 運動部に限らず、文化的活動、地域芸能や伝統文化などにおいても、何らかの基準を設けた上で評価してあげてほしい。これはしっかりと教育委員会でも仕組みを検討していただければと思う。
- ・ 地域移行については、教育委員会で決めていただいたことを、市長部局もしっかりとサポートをする。
- ・ 中体連自体が部活動の枠組みからできた団体なので、考え方を柔軟にさせていただくよう、必要があれば県知事に進言したい。
- ・ 地域移行に関する専門の部署や担当者については、必要なタイミングで相談してもらえば配慮したい。

【事務局】

- ・ 部活動の指導については、教員の考え方も二極化しており、部活動の指導がしくて中学校の教員になった職員もいれば、負担と感じている職員もいる。
- ・ 地域移行の検討が始まる前は、学校の希望によって、指導員の数の増員や運動部活動に限り運動部活動外部指導者を配置してきたが、いろいろな実態や広く意見をとっていきたい。
- ・ 「米子市版部活動の在り方協議会」では、地域人材の確保や報酬をどうするのか、受け皿について競技団体ごとにどのように周知を図るのか、そのようなことをご意見いただいている。
- ・ 市として競技団体を認可することができないかなどを検討している。
- ・ 部活動が無い競技団体への協議については、昨年度、スポーツ振興課から団体に声をかけて説明会を行った。ボートや少林寺拳法、その他の団体にも来ていただき、今後、受け皿になってもらうことができるか詰めていきたいと話をしているところ。今後、部活動の数の整理も含め、学校と地域との協議と並行して検討していきたい。

【教育長】

- ・ 部活動が担ってきた役割、子どもたちの健全育成、これを一番に考えている。
- ・ スポーツクラブが中体連の大会に参加した。これはどんな団体でも出られるのではなく、県のガイドラインを守っているかどうかを中体連が審査し、合格した団体のみが参加可能であるため、参加されている団体は、部活動の意義を抑えている団体である。
- ・ 子どもたちを評価してほしいという話があったが、受け皿の団体は、ガイドラインを守った活動を行う団体

にこだわりたい。例えば、活動内容を米子市が審査して、部活動の範囲を逸脱していないか確認し、合格した団体に所属する子どもたちの結果を評価して入試であっても通用する、そういった手順を踏む必要がある。

- ・ 子どもの数が減って、単独では部活動ができない学校もあるので、合同でチームを作る形になっていく。ただ、中体連は、一つの学校でチームを作れるのなら、合同チームを認めないため、そういう縛りは撤去してほしいと要望している。
- ・ 時期はまだ未定だが、地域移行を推進する専門の部署が必要だと思っている。今、学校教育課の指導主事がよくやってくれてはいるが、通常業務の他に、やったこともないスポーツ団体とも話をしている。そうした専門の部署が、各方面の困りごとに対応、相談窓口になっていかないといけないと思っている。
- ・ 現時点では、まだ整理しきれていないため、もう少しまとめてからだと思うが、専門部署が無いと学校教育課が全部受けることとなるため、通常業務に支障をきたす。また、ご相談させていただきながら進めていきたい。

■ 議事（３） その他（【報告】 ぷらっとホーム、サポート教室の現状について）

ぷらっとホーム、サポート教室の現状について、事務局から資料３に沿って説明。

【委員意見】

- ① 不登校の生徒にきめ細やかな対応をされている一方で、ぷらっとホームに通われる子どもさんが増えており、人員体制は十分なのか。ぷらっとホームは子どもたちが安心して過ごせるようにしてほしいので、人員不足により、子どもたちへの目が届かなかったということが無いように、人員体制を整えていただきたい。
- ② 子どもたちの入所や学校に戻るタイミングについては、臨機応変な対応をとっていただきたい。
- ③ 小中連携や保幼連携などが進んでいるが、不登校になるお子さんの数は増えている。よく遊びよく学べというが、学校に入る前に遊べる環境を、元気に遊べる米子市になったら良いのではないかと思う。学校に入る前にいろんな体験をたくさんした上で、小学校に上がれないかなと思う。
- ④ 入所されている子どもが家でどのようなことを話をされているのかという情報をもらうことが非常に大事だと考えているが、そのあたりはどのようにされているのか。
- ⑤ ぷらっとホームは使っておられる子どもたちにとっては大変有意義。
- ⑥ 不登校の数が増えているのが現状であり、幸いにして大きな事故の報道はないが、増えれば増えるほど、きめ細かな対応が難しくなり、重大事故のリスクが高まる。教育委員会で、子どもや家庭へのアプローチについて、新たなアプローチの仕方がないかを今一度考えていただきたい。
- ⑦ 子どもを育てる良い環境、そういう環境を整えていただいて、米子に子育て世帯が来たら安心して楽しんで子育てができる、そういう仕掛け、予算も含めて、町全体でそうした PR ができたらと感じている。
- ⑧ 大人と子ども、子どもと子どもが触れ合う機会を作っていくとけない。
- ⑨ 校内に安心できる場所として校内サポート教室があることはとても大事だと感じている。そういう場所があることが学校に通えることに繋がっている。学校の中のサポート教室を充実していただけたらと思う。
- ⑩ 学校の方やスクールソーシャルワーカーの方から励ましの言葉を受けて前向きになっても、自宅に帰って

振り出しに戻るケースもある。子どもも親もサポートしていただけたらと思う。明日に希望が持てるサポートを保護者にできたらと思う。

- ⑪ アフターコロナになり、学校に市長さんが来られた時には子どもたちから大歓声があがった。中学校の探求学習では市長さんからミッションが出され、秋には最終報告だが、子どもたちが出したアイデアを実際に米子市が具現化すると、子どもたちが自信を持ったり、いろいろな面の子育て環境が整ったりすると嬉しくなる。

【市長】

- ・ 不登校対策について、これまで取り組んできたことについて一定の評価を生んでいるという報告を受けた。今後、どのような形で充実させていくべきかを考えていきたい。
- ・ 低学年の子どもたちが大きく伸びる要素に「遊び」は多分にあるが、今はリスク対応も考えなければいけない。私たちが子どもの頃は良いか悪いか別にして、野山や近所の川、空地などでかなり自由に遊んでいた。今は放課後以降に遊んでいてケガでもしたらだれの責任かなど、リスクに触れざるを得ない状況である。
- ・ 私は「遊び」はすごく大事だと思うが、遊び場をどのように用意するのかについては、現在の環境の中では難しい部分がある。
- ・ 米子は雨の日の遊び場が少なく児童文化センターがあるぐらい。雨の日の遊び場を整備しようとしても、誰が管理するのか、ケガをされた場合誰が責任をとるのかという問題がある。今の実情をとらえてできることをしないといけないと思っている。
- ・ コロナ禍では自由に子どもたちが遊んだり会食したり触れ合う機会が激減した。コロナ対策の制約が無くなり、できる限り楽しいイベントや行事の必要な予算について、教育委員会から要求していただいた際は配慮したい。
- ・ 市長部局としては、子ども総本部が所管している子ども会があるが、子ども会活動もコロナ禍で低迷した。学校の外で集まって活動できる場を再構築しようということで、自治会等の子ども会活動の支援する。保護者だけでなく、地域の大人たちを通じて、学びや遊びをする取組などを支援して子ども会活動を復活させようとしている。
- ・ 根深い問題として、家に帰っても安心できないというケース。家に帰ればホッとするというケースが本来であるが、そうでない家庭もある。それが、不登校になりがちの一つの要因かと思う。これは市長部局、子ども総本部で、各家庭の具体的な問題など、家庭事情をとらまえながら、サポートしていきたい。
- ・ 東山中学校の間接報告は素晴らしいものだった。子どもたちの発想力、未来に向けての想像力は素晴らしいものと実感した。

【事務局】

- ・ ぷらっとホームに入所される前に体験等をさせていただくが、その際、必ず保護者の方と話をする。現状だと方針をセンター長及び所員がしっかり聞き取っている。常時、やり取りをするのは難しいが、保護者が送迎をされるケースが多いため、それをきっかけにコミュニケーションは取っている。
- ・ 大幅に増員していただいたスクールソーシャルワーカーを活用して学校や福祉部局の情報をキャッチして、

学校、教委だけでは難しい部分を福祉の方からフォローし、一体的に対応している。

- ・ 憂慮すべき状況の子どもについては、子ども総本部になって、家庭児童相談室と学校教育課が隣同士になっており、情報共有しながら取り組んでいる。今までも連携して迅速に対応したケースもあり、引き続いてしっかり連携していく。

【教育長】

- ・ ぶらっとホームから約半数の子どもが学校に帰れたのは、驚いたし、やっぱりそうかとも思った。
- ・ これまでは中学生が中心で、不登校が長くなってからの入所だったが、小学生が入るといことは、そのリカバーはしやすいと思っていた。
- ・ 学校に帰ることができた子どもが、どういう経緯で、どういう思いで、どういう活動をしたら帰ることができたのかは、我々が進むべき道を教えてくれるもとと考えており、これをまとめ、学校と情報共有することで不登校につながらないように学校で対応していけるようにしていきたい。
- ・ 学校は楽しくないといけない。小中サミットのテーマも「楽しく安心な学校をつくろう」ということで、生徒自身が話し合っ自分たちでそういう取組を行っている。こういう取組をしっかりやることで友達同士がしっかり繋がって安心して楽しんで学校生活を送れることにつながる。
- ・ 困ったときにすぐ手を差し伸べてくれる先生がいると児童生徒も安心できる、そういった学習を作りたい。一人一人の学習状況に応じた適切な支援をやっていこうということで、研修会を行っている。信用できる先生がいる、そういうことでも不登校は解消できると思う。
- ・ 人員も増員いただいたし、施設も作っていただいたが、まだ「すべてのこどもが成長する場へのアクセス100%」が達成できていない。どこかに子どもたちが行くことができ、連絡をとりづらい家庭にも100%アクセスする、そういった目標を設けて、数値で自分たちの学校を理解し、それを改善するにはどうすれば良いかをしっかり学校に考えてもらうような働きかけを、今後していかないといけないと考えている。